
8 to 2

瑞貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

8 t o 2

【Nコード】

N 8 2 0 3 N

【作者名】

瑞貴

【あらすじ】

水森 暁^{ミナモリ アキラ} 17歳、一般人。 田崎 遼馬^{タサキ リョウマ} 17歳、モテ王子。

お隣さんで幼馴染、ずっと一緒に成長してきた2人の真の姿が――。

「暁ちゃん、どうして俺の着歌がポニョなんだよっ！」

時々、私は運命を呪います。

※いつでもトップギア×ドン引きローギアの日常シリーズ連作です。

更新は極遅（予定）。

prologue

8..2。

パレートの法則。

経済において、全体の数値の大部分は、全体を構成するうちの一部の要素が生み出しているという説である。

たとえば。

店の売上の8割は全顧客の2割が生み出している、らしい。

商品の売上の8割は、全商品銘柄のうちの2割で生み出している、らしい。

売上の8割は、全従業員のうちの2割で生み出しているらしいし、仕事の成果の8割は、費やした時間全体のうちの2割の時間で生み出しているらしいし、所得税の8割は、課税対象者の2割が担っているらしい。

暁^{アキ}は眉間にシワを寄せてwikiを眺めていた。

ホントかよと疑い半分、偉い人がそう言って他の偉い人も認めているならホントなんだろうなと信じるのが半分。半信半疑だ。

もし。もしも。

経済だけじゃなくこの法則が暁の幼馴染にも当てはまるなら。

「暁ちゃん！何見てるの？パレートの法則？どれどれ？——へ

え

「遼馬……重い」
リヨウマ

背中にドスンと乗ってきた子泣きジジイ。奴の構成成分の20%は何で出来ているのだろうか？

「8…2の法則か。なら僕の2割は暁ちゃんへの愛だよ！俺、自信を持って言える！」

えへへ、と上目遣いで笑うこの男。
タサキ リヨウマ
田崎遼馬。

へによりと弛緩した締りのないこの顔がコイツの本当の顔だなんて誰が信じるだろう？

家の外では、顔良し、頭良し、運動神経良し。友情に厚く女に硬派。

タウン誌にもたまに取り上げられるこの男の裏の顔が。

暁がないと何も出来ないヘタレな男だと誰が信じる？

Act. 1 出したものは片付けましょう

水森 ミナモリ 暁は17年間幼馴染として付き合ってきた田崎遼馬に。タサキ リョウマ

「暁ちゃん……好きだ」

現在進行形で押し倒されている。

押し倒されたのはこれで10回目。

キスを迫られたのは50回を超えるし、告白されたのはもう何回か覚えていない。

見下ろしてくる遼馬の表情が今日は本気だと伝えてくる。

学校中の女の子の8割が格好良いと賞賛する美貌。

地区の女の子の8割がフェロモン出ると称する体。

市内の女の子の8割が一度くらいならキスしても良いと答えるだろう唇が暁に迫る。

「暁ちゃん……」

目を細めた遼馬が暁の髪を撫でようと頬に向かって右手を伸ばす――。

「遼馬。ストップ。髪。髪の毛踏まないで」

「え？ ああっ！！ご、ごめん、暁ちゃん！大丈夫？！痛かったでしょ？！」

ソファーに乱雑に広がった暁のストレートな黒髪の上に遼馬の左腕が乗っている。

うわぁ！と喚きながら暁の上から退却モードになった遼馬は。そのままソファーの下へと落下した。

体を起こしながら暁はため息をつく。

「慌てなくていいよ。怒ってないから」

「暁ちゃんゝゝごめんよゝゝ」

「それより、遼馬。私、一昨日来たわよね？なのに、どうしてこうなってるの？」

暁がスイツと指を指した方向はリビングの床。暁の気に入っていたガラステーブルはそこにある。先日遼馬が鉄アレイを落として壊した。

靴下。ペットボトル。スナック菓子の袋。レンタルしたらしいDVD達。歯磨き粉。ビール缶6本と裂きイカ。これはおじさんね？ネクタイ。雑誌。新聞。鉄アレイ、またか。リビングでの使用は禁止したのに。竹刀の入った袋。

パジャマ代わりのスウェット2人分。押し倒された時に脱ぎ捨てた遼馬の制服のブレザー。

「ねえ、遼馬？私だって初体験には夢を持ってるんだけど？」

「あっ！そっ、そうだよねっ！暁ちゃん、初めてだもんね？！女の子だもんね？！やっぱりホテルのスイートとか綺麗な所がいいよね？！」

背筋を伸ばして正座した遼馬が勢い良く返事する。

足の下には新聞紙。せめて座る所の物は横にどければいいのに。

「わかってもらえて嬉しい。なら言いたいことわかるよね？」

「俺、すぐに片付けるから！」

「そう。私は台所を片付けるからね？今日は何が食べたい？」

「ハンバーグ！オレンジソースにしてよ！」

「それじゃ、掃除が終わったら挽肉を買いに行こう」

「デート！？うわっ、早く終わらせなきゃ！暁ちゃん、今日は手を繋いで行っても良い？」

「それは駄目。遼馬目立つんだから」

「暁ちゃんは、すぐ恥ずかしがるんだから、もうっ！」

拗ねた遼馬が口を尖らせる。こうなると長い。

暁はいつものように無視して台所へ向かった。

「暁ちゃんの意地悪くくく！」

後ろで遼馬が叫んでいるのを放置して、台所の惨状に眉を上げる。たった2日でどうしてこうなるのか。田崎家の7不思議と暁は常々思っている。

ダイニングに置いたバックからi p o dを取り出しイヤフォンを装着する。

これで余計な雑音は入ってこない。

暁は制服の袖を捲り上げると、洗い物の山に宣戦布告をしたのであった。

Act. 2 挨拶は大きな声ではっきりと

暁の朝は早い。

起床は毎朝5時半。寝起きの良い暁は、起きてすぐ身支度を済ませ階下へ降りる。

「おはよう、暁」

「おはよ。ママ」

ダイニングに座ると出てくるのはカフェオレ。キャラメルシロップを少しだけ入れるのが暁の好みだ。

「これ拓真^{タクマ}さんに持っていて？ワカサギのマリネ」

「うん」

「それから、週末はすき焼きをするから来るよう伝えて？」

「わかった。じゃ行ってくる」

拓真というのは遼馬の父だ。うちの両親と拓真さんは仲が良い。実は親同士も幼馴染の関係だったりする。

暁はゆっくりゆっくりカフェオレを飲むと、マリネの入ったタッパーを持ち玄関へ向かった。

靴を履いて屈伸を数回。気合を入れる。暁の戦いは隣家に乗り込んだその瞬間から始まるのだ。

時刻は6時。門を出て、すぐ門に入る。持っている合鍵で隣家の玄関ドアを開けると「お邪魔します」とスタスタ家の中へ上がりこんだ。

揃っていない男物の靴や廊下に落ちている複数のレシートやらDMやら靴下は視界に入れないのがコッだ。リビングにはキュツとネク

タイを締めている拓真の姿があった。

「やあ、おはよう暁ちゃん。今日も可愛いね?」

「おはようございます。拓真さん、おニューのネクタイですか?」

「お。わかる? 経理のアユちゃんからのプレゼントなんだヨ」

「確か昨日のブランドネクタイピンは、キャバ嬢のマリちゃんから
と言ってませんでしたか?」

「あ、あはは。よく覚えてるね?」

「拓真さん。女遊びは程々にしないといつか刺されますよ?」

「や、やだなあゝ暁ちゃん。怖い事言わないでよ」

顔を引き攣らせた拓真さんは38歳。

まだまだ若く、遼馬とよく似た整った顔に人当たりの良い柔らかい
物腰、おまけに外資系企業で役職持ちの独身とくれば、大きいコブ
など問題なしと女が放っておかない。どうやら本人も、寄って来る
女の下心を十分理解したうえで、面白楽しく遊び歩いてるようだ。

暁は拓真の目の前で大きく肩をすくめると、母からの伝言を伝え
そのまま2階へ上がった。

背中に「暁ちゃんヨシヤ。由哉と清香キヨカには黙っててっ! お願いっ!
ちゃんと程々にするから!」と情けない声を聞く。

由哉、清香とは暁の両親である。知られたくないならしなきゃい
いのに。遼馬そっくりの言い回しに、2人の確かな血のつながりを
感じて暁はため息をつきたくなった。

ノック無しで通い慣れた部屋のドアを開ける。

ベッドで惰眠を貪る幼馴染の姿に今度は本当にため息が出た。

「遼馬。朝だよ?」

遼馬が手の届かない位置に立ち、数回声をかける。近づいてはい

けない。布団に引きずり込まれるのはもう御免だ。

反応の無い男に、暁は第2作戦を決行する。

遼馬の机の上に置いてある”暁専用。触るな”と書かれたボックスからワインレッドのエアガンを取り出す。

メーカーのキャッチコピーは”安心パワーで楽しく撃てる!”。問題など無い。

「遼馬?早く起きて」

遼馬に向かって躊躇いなくBB弾を連射。さすが安心パワー。布団に当たる音は弱い。

だがカツ、カツ、カツと頭や顔に当たる弾はそれなりに刺激的なのだろう。遼馬は「あうゝゝ……」と唸り、逃げるように背を向けて丸まった。

作戦は第3段階に移行する。

眉間にシワを刻みながらスチャツと暁が手に持ったのは部屋に立てかけてあった遼馬の竹刀だ。

専用ボックスにもう一つ入れてあった、暁手製の”真心カバー”。優しさという綿の詰まったカバーを竹刀の先に被せる。

「時間。覚悟」

数歩近づき、遼馬の頭目がけて振りかぶる。力加減はマスターした。

竹刀は今日も速やかに遼馬の目覚めを促した。

「~~~~~っ!!」

頭を押さえて悶絶する遼馬を見下ろし、暁は花の様に笑う。
涙目で混乱中の遼馬は、それだけで色々な不満を飲み下したよう
だ。

「おはよう、遼馬」

「あ、暁ちゃん……」

「起きて良かった。それでも寝てたら先に行こうと……」

「駄目！そ、それは絶対駄目っ！！！」

たまには別々に登校したっていいじゃないかと思うが、遼馬は絶対に納得しない。

優しく揺さぶって起こすとかホッペにキスとか、いや、く、口にキスでもいい。方法はあると思うんだけど、ああ、でも暁ちゃん可愛い。今日も暁ちゃんは最高すぎる。

聞こえていないかと思っているのか、ブツブツ呟く遼馬を暁は一瞥する。

「男の事情が、って起こすときあまり近寄るなど言ったのは誰？」

途端真っ赤になってアワアワと首を横に振りまくる遼馬。そのまま言い訳らしきものを叫ぶ遼馬は、今朝も壊れている。あーアホらし。

17年。長い月日を共に過ごした。その間、暁は静かな朝を迎えられたことがない。この男には静かに目覚める機能が備わっていないのだろうか。

やがて、ゼーゼーと肩で息をした遼馬が顔を上げた。

暁と視線をしっかりと合わせる。1、2、3、4、5、6、7、8秒。

「おはよう。暁ちゃん」

6時半。

フワリと優しく目を細め、薄い唇を引き上げる。暁だけに見せる
艶っぽい笑顔の遼馬。

そんな遼馬は非の打ち所が無く、イイ男だった。

A c t. 2 挨拶は大きな声ではっきりと（後書き）

B B 弾、人に向けちゃ駄目です。暁さん。
真似しないでくださいね。

Act. 3 選択は慎重に

「あら、遼馬君、暁ちゃん、おはよう。今日も暁ちゃんと一緒に本当仲良いのね」

「遼馬先輩だぁ。おはようございますう」

「田崎！試合来週だろ？がんばれよ！」

「田崎君！おはよう！」

「田崎先輩！おはようございます！きゃー！朝から先輩に会えるなんて嬉しいです！」

「はよ、遼馬。なあ、今度一緒にナンパ行かね？お前となら入れ食いなんだけど……って水森さん、そんな冷たく見ないでよ！？」

家を1歩出たときから、暁の周りには人の声が溢れ返る。

原因など一つだ。

隣を悠々と歩くこの幼馴染殿。今日も完璧なこの男は「おはようございます」「ありがとうございます」「今は試合に集中したいからまた今度」などと、そつの無い王子スマイルと魅惑の低音ボイスで周囲を何度でも魅了し続ける。

暁と遼馬が歩くスピードに合わせ、もれなく付いてくるギャラリィ。その金魚の糞的集団が規制が必要な人数になる頃、2人は学校へ到着する。

暁が黙々と歩いて10分。腕時計をチラリと見れば8…02ジャスト。

なぜこの状況でこの時間にいつも到着出来るのか。これも田崎家7不思議の一つである。

「おはよう！暁！遼馬君！」

下駄箱で遼馬の名前より先に暁の名前を呼んだのは、橋本真奈美。
暁の数少ない親友だ。

「おはよう。真奈美」

「あれ？暁、寝不足？いつもより疲れた顔してるけど……」

「いつもよりって何？寝不足じゃないわ。朝、ちょっと」

「ああ…そっか！」

靴を履き替える暁の頭をクシャツと撫でる大きな手。

「暁。じゃ、俺行くな？」

「うん」

「また昼に」

「うん」

暁に向かってフツと笑った遼馬は、自分の教室に向かって歩き始めた。男女問わず入り乱れた集団がその後ろを付いて行く。

暁は2-C、遼馬は2-A。

腐れ縁という無用に頑丈な絆の2人は、何の因果か小1から高1までの間、離れることなく一緒のクラスで学校生活を送ってきた。

だから2年に進級する際のクラス替えで初めてクラスが分かれた時は大変だった。

ただでさえウザイ男だ。5月に入るまで泣くわ喚くわ四六時中纏わりつくわで、暁の精神力はペラペラな紙になるまで削られたのだから。

このままでは心労で殺されると身の危険を感じた暁は、遼馬に一冊の女性誌を差し出した。

ハートや星が乱舞する特集の見出しは、『遠距離恋愛の達人に聞く!』。

目に突き刺さるドピンクpopな丸文字に、内容は推して知るべし。

会えない時間が愛を育てるやら、しばらくぶりのHが燃えるやら、小豆缶に砂糖と蜂蜜をたっぷりかけて食す程に甘い歯の浮くトークが続く（暁は早々に読むのを放棄した）。

遼馬は夕食が出来上がるまで、血走った目で特集の隅から隅まで読破していた。

おそらく暁が帰った後も何度も何度もしつこい位に読み返したに違いない。

翌朝。ページがヨレヨレになった雑誌を片手に、遼馬は宣言したのだ。

『暁ちゃん、聞いてほしい。ずっと俺、こんな苦しみを与えた学校を恨んでいたんだ。だってそうでしょ？愛する者達を引き離す権利が他の誰にあるんだい？校長に直談判しようと思って、あいつの弱みも集めてたんだけど……これは俺達に与えられた試験だったんだ。離れる事が恋愛のスパイスだなんて、俺、全く気づかなかったヨ。ハハッ……。馬鹿だって笑って？お互い好きあっている俺達になかなか次のステップに進めないのは、2人の距離が近すぎてスパイスが足りなかったせいかもしれないのに。情けないよ。俺、さ？一生暁ちゃんの傍に居て、一生暁ちゃんを守る。そのために必要ならこの試験を受け入れる。必ず乗り越えてみせるから、それまで暁ちゃんも辛いだろうけど待って欲しいんだ!』

キモイ。

そして痛い。

クラスが離れて万歳三唱をした暁は、鳥肌の立った腕を擦った。遼馬は尚も恍惚としたオーバーアクションで演説を繰り広げているが、暁は脳内で響いた退却命令に従い、こっそり耳栓をグリリと嵌める。

たかがクラスが離れただけでこの騒ぎ。こんなキモ発言を朝っぱらから聞かされるとはどんな拷問だ。

大体誰と誰が好きあった仲だ？次のステップへ前進うんぬんより、暁は全力で後退する事を選ぶ。言えば確実に厄介な目にあうのがわかってから言わないだけだ。

『あゝあ。どうして学校の授業は6限まであるんだろう。背筋を伸ばして授業を聞く暁ちゃんの凛とした姿が俺の楽しみだったのに……。あ！お弁当を食べながら橋本さんと笑ってる暁ちゃんはおつと好きだよ？！男と話してるときは相手の男殺したくなるけど――』

男と話したといっても委員会や部活などの業務連絡が主だ。それで殺されては相手の男だとして浮かばれない。

とはいえギリリと鋭い目をした遼馬に一方的な妄想を聞かされた暁は、この場合どんなリアクションを取るのが一番穏便に済むかを考える。我が身さえ無事ならば多少（？）の犠牲もやむなし。長い間に培われた経験則だ。

遼馬の病的な発言は「こんなことがあった」「あゝゝ！あんなこともあった！」と止まらない列車の如く続く。

『――そうだった。暁ちゃんはこんなに可愛いんだ。どうしよう？！俺の見えないところで暁ちゃんに悪い虫がついちやう！クソッ、駄目だ！やっぱり駄目だ！学校での暁ちゃんをずっと一人になんて出来ない！』

――雲行きが怪しくなってきた。

休み時間は同じクラスになった真奈美と一緒に居るし、大体私に話しかけてくる男など居ないのに妙な気を回しすぎだ。そう何度暁が話しても、遼馬は引き下がらなかった。

1週間もの間くだらない言い争いを繰り返し、そして渋々遼馬は妥協案を提示したのだ。

なら昼休みは 絶対 に 一緒 にお弁当を食べよう、と。

この男は究極に空気の読めない馬鹿だった。

「あゝ、もう遼馬君ってば！たまには私も暁と一緒にご飯食べたいんだけどなあ」

「ごめん、真奈美。私も 毎日 真奈美と食べたいんだけど……」

「はあ……。仕方ないかあ……。で、遼馬君は相変わらず？」

「うん。全く気づいてない」

そう。遼馬は自分がいかに人目を引くのかわかっていて癖に、肝心な事をわかっていない。

家が隣同士で幼馴染の暁の存在が周囲にどう思われているのか。幸いいじめには至らないとはいえ、コソコソとした女生徒の陰口を暁は毎日聞き流している。

毎日の登下校でさえ気を使っているのに、それに昼の時間が加わった。

かと言って申し出を断れば、待っているのは騒音指数Maxで泣くウザイ男。

受け入れたなら、待っているのは女生徒からの羨望と嫉妬の鋭い視線。

前門の虎、後門の狼。

ああ面倒くさい。全てスルーという第3の選択肢が欲しい。

結局、暁は前者を受け入れざるを得なかった。

今では昼休みが近づくにつれ深くなる眉間のシワを揉む事が癖になっている。

真奈美だけが家族を除いて暁達の間係を正確に知る唯一の人物で暁の味方だった。

Act. 4 外堀はしっかり埋めよう

今日も今日とて暁の足は田崎家へ向かう。

掃除したばかりの場所に新たな障害物の存在を確認しながらいつものように遼馬を呼ぶ。

「遼馬ー。ご飯出来たよー?」

「了解〜」

遼馬は基本的に平日は暁の家で夕食をとる。

父、拓真の帰りが遅く夕食を外で済ませてくる事が多いからだ。

例外は暁が夕食を作るとき。

暁の仲の良い両親は月に2回程「ジュ टीम day」と称するデートに出かける。その日だけは子供抜き、夫婦水入らずでラブラブしたいらしい。

小さい頃は遼馬と2人、水森の祖母に預けられた。

大きくなってからは遼馬と2人でお留守番だ。

ジュ टीम ジュ टीम と浮き足立つ両親を暁は冷めた目で見ながら育った。勝手にシルブプレだ。今の暁の性格は両親を反面教師に育ったものといえよう。

一方遼馬はそんな暁の両親をキラキラした目で見て育つ。「由哉パパ達みたいな夫婦が理想!」と言い切る。アレのドコが? しかも、暁の両親は慕ってくるそんな遼馬が昔から可愛くて仕方ない。

暁の気持ちは置き去りに、いずれはダブルデートをと3人は盛り上がる。キャ〜!と身悶えている清香(38)。身の毛がよだつ。拓真は唯一暁の気持ちをわかってくれるが、「でもなあ、遼馬は暁ちゃん命だからなあ……」と困った顔だ。由哉と清香に頭の上

らない拓真。更に成長した遼馬にも頭が上がらなくなった拓真。この人に何を言っても無駄だと暁は早々に見切りをつけた。

「今日は？」

「ロールキャベツ」

「やた！清香ママのマジで好き！」

そう言いながら暁の手を握ってくる遼馬。

「……何？」

「ん〜ん！暁ちゃんの手、小さいなあ〜って思ってた！」

「普通だよ？」

「い〜や！ホラっ！」

暁の左手に重なる遼馬の手は一回り大きい。ゴツゴツした竹刀を握る肉刺だらけの手は、確かにもう大人の男のようだ。

「小さい頃は同じくらいだったのにね？」

「もういいでしょ？放したら？」

「イ・ヤ」

機嫌よく再び握りこんだ手をブンブン振りまわされる。

繋いだままの手は靴を履くときも解放されなかった。

「ねえ、暁ちゃん？」

「何？」

「好きだよ？」

「聞き飽きた」

「本気なのにひどいなあ」

泣き真似をする遼馬にかまわず、暁は水森家のドアを開けた。

「遼ちゃん、いらっしゃ：やだ！暁！」

台所から顔を出した清香は、驚いた後『カメラカメラ！写メ写メ！』とリビングへ。

「……ちょっと。ママ？」

「清香ママ」

「だってだって！恋人繋ぎじゃないの！由君にも見せてあげないと。遼ちゃん、放しちゃ駄目よ？！」

「了解～～！」

「遼馬？」

「怖い顔してもダ～～メ！俺も写真欲しいし！」

ね～～っ？と息ピッタリの清香と遼馬。

こうなったら暁は諦めるしかない。

騒ぐ清香とノリノリでポーズをきめる遼馬を暁は極力見ないようにした。

写メを送ればすぐに鳴る受信音。曲はエディット・ピアフの『イムヌ・ア・ラムール（愛の賛歌）』。これが鳴るたび暁の心は締め付けられる。その恥ずかしい選曲は止めろと暁が半泣きで頼んでも清香は聞いてくれない。

「うふふ。由君、拓真さんにも送っておくって。やあね、出会ったばかりの俺達みたいだ、なんて、もうっ！」

両手を頬に当て恥らう清香（くどいようだが38）。
仕事はどうした桃色脳由哉（こっちも同じく38）。

「や、だってホントに暁ちゃん可愛く撮れてるし！この嫌がる表情がまた……イテテ！」

遼馬は遼馬で清香に微妙にずれた返事を返す。暁がどんな顔をしていようが関係ない。問題はいまだに放そうとしないこの”手”だ。暁は空いた手で遼馬の脇腹を抓りあげながらため息を付いた。

一足遅れて鳴る携帯。『桜』。

「拓真さんから。『遼馬、程々にな？暁ちゃん、ふぁいとー』だつて」

やっぱこの人じゃ無理だ。
暁の味方はどこにも居ない。

A c t. 4 外堀はしっかり埋めよう（後書き）

『桜』は森山でもケツメイシでもコブクロでも清水でも、お好きな曲で！

A c t. 5 争って高みを目指す（前書き）

11月18日 加筆しました。

Act. 5 争って高みを目指す

「きゃー！遼馬先輩ー！」

「遼馬君ー！」

ダン！バン！ドン！キュキュ！

そんな熱い青春の音も、武道場の外側から響く悲鳴のような黄色い声に消え去ってしまう。

毎度の光景だが武道場の中へ入る事を禁止されたギャラリーは、myイス持参で自分の背丈より高い武道場の窓という窓にかぶり付いている。

『女郎蜘蛛みてえ』とクラスメートの男子生徒が言ってた。言いてて妙だと暁は思う。

「ハイハイ。こっちに集中。ちゃんと見てー？」

部長の杏里あんりが、構えを促す声に後輩たちが慌てて姿勢を正した。

「いい加減慣れて欲しいよ。ねっ、暁！」

ポヤポヤした雰囲気我真奈美だが、こう見えて体育会系の熱い女だ。

唇を尖らせて1年生を睨む真奈美は次期部長の呼び声が高い。真奈美は暁がと考えているようだが、いくら大会の成績が良くても暁にそこまで部活への情熱はない。これ以上面倒事を引き受けるつもりはサラサラなかった。

暁の活動する弓道場と、遼馬の活動する武道場は隣接している。何も部活動でまで隣にならなくてもいいんじゃないかと嘆いてみても中学の頃からこうだったのだから偶然の采配とはいえ最早諦めるしかない。

そもそも暁が中学に入り部活に弓道を選んだのは、遼馬から離れて1人になれる場所が欲しかったからだ。

弓はいい。的と一対一で向き合う時間は全てを忘れ無心になれる。始めてみれば暁はメキメキと上達し、すぐに地区大会で上位に食い込む程の腕前になった。

一方遼馬は。

勿論暁と同じ部活に入る気満々だったのだが、幸い暁達の中学で弓道部は女子部しかなかった。

ほくそ笑む暁に、離れまいと必死になった彼は同じ武道の道を選んだ。剣道場はその時も隣に建っており、開け放たれた広い戸口から弓道場が一望出来た。後で聞けば遼馬が剣道を選んだ一番の要因はまさにソレ。「部活中も暁ちゃんの姿が見れるから最高じゃないか!」とのたまう奴を半殺しにしたのは苦い記憶だ。

もつとも遼馬も剣道は向いていたらしい。運動神経が良かった遼馬は、暁と同じくメキメキ上達した。今では全国大会で何度も入賞する腕前の持ち主だ。

誰も信じないかもしれないが、その原動力が何だったのか。

不純な動機で剣道を始めた遼馬は、大会の度に暁に応援を強制し、邪な賭けを持ち出してきた。

『優勝したらデートして欲しい』

時にはそれがキスになったり、添い寝（Hナシ）だったり。

暁はモジモジしながら赤い顔で言ってくる遼馬を冷たい視線で黙

殺した。そんな賭けなど誰が乗るものか。だが、ズルイ遼馬は負けの場合暁に週末どちらか一日だけ（1日が譲れない線だったらしい）完全なるフリータイムを提供するというのだ。

フリータイム（遼馬ナシ）。

幼い頃から遼真に纏わりつかれていた暁にとって奴の顔を見ない日など一切なかった。

1日とはいえわずらわしさから解放された自由。ああ、喉から手が出るほど欲しい。

脳内で葛藤した末、誘惑に負けた暁は渋々賭けに乗った。

暁は今でも思う。何故一番初めに賭けを持ちかけられた時にキツパリハッキリ断らなかったのか。

遼馬と数々の名勝負を繰り広げてきたライバルといわれる全国の剣士諸君。

まさか真剣勝負の只中で気迫に満ちた相手の頭の中が延々とリピートする煩惱でいっぱいになっていると誰が思うだろう？脳内メーカーの大半が”暁”で埋まる男、それが遼馬だ。残りが何で埋まるか、暁は考えたくもなかった。

かくして遼馬は並み居る強豪を蹴散らし、現在の名声を手に入れる事になった。

賭けの約束を暁が守る事は一度たりともなかったけれど（そして毎回『嘘つき！』と大泣きされる）。

高校に入学した4月。

暁は迷うことなく弓道部入部を決めた。

遼馬は今度こそ同じ部活で目くるめく愛の日々を！と鼻息荒かったのだが、遼馬にとって不幸な事にこの高校の剣道部には同中剣道部だった先輩が居た。中2当時主将を務めていた彼の先輩葛西氏は、

良い人なのだが血潮が侍魂に侵されている残念な人だった（尊敬する人…塚原卜伝、将来の夢…戦わずして勝つ！と卒業文集に書いた病持ち）。

入学式後、遼馬は葛西氏とその部下に両脇を取られ「よう来た、弟子よ！パワーアップした我が一の太刀を受けてみよ！」と有無を言わず道場へ連れ込まれた。

暁とツーショット、肩を抱いて校門前で写真を撮るといふ夢を壊された遼馬は、葛西氏を木っ端微塵に叩きのめし、その日のうちに遼馬の剣道部入部が決まる（顧問と部員一同に囲まれ逃げられなかったらしい）。

その夜、遼馬は朝まで泣いた。

暁はというと、高校生活の気鬱を一つ払ってくれた勇者葛西氏を褒め称えながらサッサと眠りについた。

翌日、真っ赤な遼馬の目を氷で冷やしてやる親切心が湧くほど気持ちよく熟睡した。

「水森さん」

「……はい。ああ、船津部長」

遠い日に戻っていた暁は声音には出さず慌てて返事した。

声をかけてきたのは黒縁メガネの男子弓道部部长、フナツカイリ船津海里。

「ごめん。驚かせちゃったね？あの、今日の弓道場の鍵当番水森さんだったよね？それ今日俺やるからいいよ」

「部長、残るんですか？」

「うん。大会近いから。最後だから精一杯やりたいしね」

「はい。——私もご一緒していいですか？今日はイメージ通りにい

かなかったもので」

「もちろん、大歓迎だよ。でも右手首でしょ？捻った？」

「……ばれましたか。捻った心当たりはないんですが、引く時にちよつとだけ違和感があった」

「うーん。だったら無理はしない方がいい。悪化したらどうするの？ 安静第一です」

「でも大会が……」

「焦っても結果は出ません！ でしょ？」

「……はい！」

船津は暁の先輩、3年生だ。腕も確かで去年地区大会で優勝した。最後の年である今年、部長として弓道部をまとめながら2連覇を目指し頑張っている。

遼馬の派手さに隠れているが、理知的な顔で成績も優秀。大人な雰囲気 が地味に人気だ。

暁の学校の弓道部は名義上男子と女子に分かれてはいるが活動は一緒に行く。男子部も女子部も仲がよく、暁は参加したことがないが、部活外でもカラオケやらボーリングやら和気藹々と集まる事が多い。

そんな男女間の垣根のない部だったから、大会入賞者である船津と暁は自然と会話する事が多くなった。落ち着いた物腰ながらも時に砕けた話し方をする彼を暁は好ましく思っていた。

普段うざすぎる人物に振り回されているため、落ち着いた彼との会話はホッとする。

暁は自然と緩む口角を自覚してはいなかった。

そして、そんな彼女の様子を目を細めて見ている目の前の男にも。

和やかな時間は一瞬だった。

「船津先輩、失礼します」

当たり障りのない挨拶が2人の時間に割り込んだ。

「暁。お待たせ。そっちも終わった？」

そう言って微笑む遼馬。

待ってなどいない。

黄色い声がどんどん間近に迫っていたのは知っている。毎日、なのだ。耳障りな甲高い声を意識外へ放り投げるのに慣れもする。聞き慣れた声に潜む苛立ちにも慣れた。しかし家とトーンが違うよそいきの声に悪寒が走るのは止めることが出来ない。

「遼馬、迎えに来なくても良いと言ったはずよ？」

「どうせ一緒の方向だろう？ 暁の事は清香さんにも頼まれてるからね？」

猫を被った遼馬はいつもこれだ。尤もらしい理由を掲げて、誰にも気づかせる事なく自分の我を通す。

「そうそう、清香さんが80屋くやおや>でタイムセールお一人様2個の大根と豆腐買ってきてって。あまり時間がないんだ。早く着替えておいでよ」

そして暁はわかっていてもそんな遼馬に対抗する術を持たない。暁が口で何を言ったって外での遼馬には勝てないのだ。

「……すみません、船津先輩。お先に上がらせてもらいますね」
「ん。またね、水森さん！ 気をつけるんだよ？」

ニコニコと笑顔で更衣室へ向かう暁を見送っていた男2人。

暁が居なくなった瞬間、男2人は笑顔を消した。話すでもなく睨むでもなくお互いに無関心を装う。

本能的に彼らはお互いが“この件”に関して好敵手であると認めている。

遼馬は余計な口を開かない。

船津も余計な口を開かない。

口を開くときは、戦いの火蓋が落とされたときだと知っている。戦いを仕掛けるにはタイミングが重要だ。2人はそのタイミングを計っている。

だから今しばらくはこのまま。

男達がジッとゴングを待っているのを暁は知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8203n/>

8 to 2

2010年11月27日11時57分発行